

第10回 広島大学心理臨床セミナー

## 「箱庭療法セミナー」 全体講演

松下姫歌 (広島大学大学院教育学研究科)

2006年12月の第10回広島大学心理臨床セミナー「箱庭療法セミナー」は、当時、京都大学教授であられた、日本箱庭療法学会理事長の岡田康伸先生をお迎えし、主に臨床心理士をはじめとする心理職の方や、心理士をめざす大学院生を対象とした、専門的な研修プログラムとして開催した。

午前の部は岡田先生のご講演と事例検討、午後の部は分科会方式でのグループスーパーヴィジョンというプログラムでおこない、完全予約制・クローズドの5時間にわたるセミナーであったにもかかわらず、たいへん沢山のご参加を頂いたことについては、既に、この前巻にあたる、2006年第5巻の当センター紀要で報告させて頂いた通りである。その際、セミナーの内容については、事例検討の部分については守秘義務の観点から報告を差し控えさせて頂き、岡田先生が公開講演と事例検討を通してお話下さった、箱庭療法の治療的要因および、箱庭療法を越えた、心理療法における治療的要因のエッセンスについて、筆者なりに受けとめたことを中心に報告させて頂いた。

しかし、箱庭療法の治療的要因について、すべての心理療法の底に流れる重要な本質を汲み上げ、かつ、これほどわかりやすくまとまった形で示されたものは、意外に少ないのではないかと思われた。そのため、このご講演を、是非、岡田先生ご自身の語られるままに記録として留め、公表させて頂けるようお願いし、今回、岡田先生の御厚意により、ご講演「箱庭療法の治療的要因について」の全記録を掲載させて頂けることとなった。たいへん有難いことであり、この場を借りて感謝いたしたい。

ご講演録を、お読み頂き、お聴き頂けばおわかりになると思われるが、岡田先生の理解は、単に、箱庭療法を用いる場合にどう理解するか、というようなことではない。また、箱庭療法では、出来上がった作品をどう見るかだけでなく、むしろ、プロセスを重要視し、その時その時のプロセスと回を追っての流れを大切にしているが、岡田先生のプロセス理解は、まさしく process の何たるかを痛感させられる。すなわち、それは決して、プロセスが顕在的に生じて見えてくるのを外側から眺めるといような、プロセスをいわば実体化した見方をするのではない。process とははたらきであり、はたらきの現れの背後でそれを生み出している心のいとなみがある、ということに徹底的に目を向けるあり方である。心が何かを受けとめあうことで生じていく「力動性」に、目に見えにくいけれども確かに存在している主体の力を見いだしていく観点こそが、プロセス理解なのだと思われる。それは、実は箱庭に限らず、すべての心理療法のプロセス理解の根底にあるべき観点ではなかるうか。

岡田先生自身が「あげるのを忘れていた」と仰っていたが、講演の中に「自然治癒力」という用語があげられていない。むしろ、その概念の何たるかを言葉を尽くして語られていると思われる。